

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：35503

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01377

研究課題名（和文）総合資料学にもとづく古代アンデス文明の社会統合の解明

研究課題名（英文）Investigating the social integration of the ancient Andean civilization based on comprehensive materials science

研究代表者

鵜澤 和宏（Uzawa, Kazuhiro）

東亜大学・人間科学部・教授

研究者番号：60341252

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では人と動物の関係に着目し、古代アンデス社会の複雑化過程を明らかにすることを旨とした。最も注目したのは家畜飼育の開始と社会の不平等化の関係である。先行研究では、これらが同期的に進行した可能性が示唆されていた。ペルー北高地に所在するパコパンパ遺跡、クントウルワシ遺跡で出土した動物骨資料を考古学、生物考古学、同位体科学の手法によって分析した結果、リヤマ飼育の開始とともに社会内部での権力形成が顕著となったとする仮説は否定された。権力の発生は家畜飼育に先行して生じており、リヤマ飼育集団と神殿社会との統合を理論化する新たなモデルの必要性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アンデス文明は文字を持たずに高度に複雑化した社会を形成した。社会の統合に必要な世界観の共有は、動物を用いた祭祀、動物をモチーフとした多様な図像表現が貢献したと通じて行われたと考えられる。本研究では、遺跡から出土する動物骨を考古学、自然科学の手法を用いて分析し、当時の動物利用の実態を解明し、文明発達の機序にせまった。

人類が動物を家畜化したことは、社会内部における人間同士の不平等な関係を生じさせたとの仮説があったが、本研究ではこれが否定された。人と動物の関係は人間社会の理解にも有効な視座であり、古典的な解釈を上書きする新たなモデルの構築が必要であることを本研究は示した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the relationship between humans and animals and aims to clarify the process of social complexity in ancient Andean societies. The most important focus was the relationship between initiating livestock rearing and social inequality. Prior research suggests that these processes may have proceeded synchronously. The analysis of animal bone material excavated at the Pacopampa and Kuntur wasi sites in the northern highlands of Peru, using archaeological, bioarchaeological, and isotopic methods, refutes the hypothesis that the onset of power formation within society was marked with the start of llama husbandry. The emergence of power occurred before livestock rearing, and the need for a new model to theorize the integration of the llama-rearing group with a temple society became apparent.

研究分野：動物考古学

キーワード：古代アンデス 家畜化 文明形成 動物利用 人と動物の関係

1. 研究開始当初の背景

南米アンデスに展開した文明は、その最終到達点であるインカ帝国に至ってもついに文字を持たなかった。文字の代わりに、ジャガーやヘビ、ワニといった様々な動物が神殿や土器を飾り、抽象的な世界観が表現された。各種の動物にはそれぞれの特徴に紐付けられた意味が付与され記号として用いられたことが推定される。とくに祭祀空間の中心には肉食動物の図像が多く用いられており、自然界の食物連鎖が人間の社会関係に引き写されていた可能性を暗示する。神殿遺跡からは動物骨が大量に出土しており、実際に動物を用いた儀礼が盛んに行われていたことも確認されている。古代アンデス社会において、動物は単なる食料資源ではなく社会統合の原理を説明し強化するための象徴性を帯びた存在であったと考えられる。

アンデス諸文化における動物の象徴的利用に着目し、図像を読み解くことによってその世界観を理解しようとする試みには長い研究史がある。しかしそれらの多くは図像の型式学的な研究にとどまり、動物が示す意味の体系を十分に理解するには至っていない。それぞれの種がもつ多面的な属性のうち何に注目するかは観察者自身の文化的背景に制約を受け、それぞれの動物が古代文化の脈絡のなかでどのように認知されていたかを知るのには容易ではないからである。動物の象徴的利用について理解を深めるためには、まず古代社会の動物利用を具体的に復元することが不可欠であり、その証拠にもとづいて生業と世界観、いわば上部構造と下部構造を一体のものとして理解する視点が求められる。

ところで、動物を記号やメタファーとして扱うことは、人類が汎文化的に行なう一般的な傾向であるともみなされている。アンデス文明はこの特徴を高度に発達させた社会と位置づけられるだろう。アンデスの諸文化で行われていた動物の象徴的利用を探究することによって、自然から観察した事象を記号化し、人間社会の関係性のなかに敷衍する思考について理解を深めることができる。これは考古学が対象とする多くの先史社会へも応用が可能であろう。

Tilley は、人間も動物の一種であるとの視点から、さらに論を進めて「人間と動物の関係」がその社会における「人間と人間の関係」にも影響を与えると述べている。同様の主張は、Haudricourt(1962)以来、Brotherstone(1989)、Hodder(1990)、Ingold(1980)など、現代の牧畜社会の研究を通じて提唱されているところである。しかしながら、この説の妥当性について具体的な考古学的事実にもとづく検証は十分になされておらず、現状では仮説にとどまっている。人類の動物利用は多様な目的・方法を含むものであった。その変遷が人類社会の複雑化とどのような関係にあるのか、歴史的な視座から探求することが求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古代アンデス社会が複雑化する際に機能していた統合原理を、動物儀礼、図像表現などを含む広義の動物利用の観点から読み解くことにある。その前提として、まず出土資料から具体的な動物利用の復元を行う。特に注目するのは、家畜飼育の開始によって人間と動物の関係が大きく変化する前後の動物利用および社会の比較である。人間と動物の関係の変化が、人間同士の社会関係に影響したとする仮説について、実証的なデータに基づいて検証する。本研究の目的は次の3点にまとめられる。

生業（下部構造）と世界観（上部構造）の統合的理解

従来、遺跡から出土する動物骨資料の分析は、生業復元などいわゆる下部構造の理解を主な目的としてきた。調査者が“合理的に説明できない動物利用”は“なんらかの儀礼行為”と解釈され、下部構造とは切り離された上部構造の問題に転嫁される傾向もみられた。本研究が対象とするアンデス形成期（前1,200～0頃）は、祭祀を行う大型の公共建築が築造されたが、そこでの活動には毛織物生産、銅製錬など多様な生産活動が行われたことも判明している。つまり形成期社会において、儀礼と生業は不可分に結びついていた可能性が推定される。分析手法として生物考古学、環境考古学的アプローチを踏襲しつつも、データの解釈にあたっては下部構造と上部構造を統合した視点から資料の分析を進めた。

歴史的視座に立った社会統合原理の探求

神殿を中心にまとまっていた形成期社会は紀元前後に崩壊し、より国家的な統制を強めた社会に再編成される。この時期は地方発展期（後1年～600年頃）とよばれ、狩猟活動が衰えて家畜飼育が優占するなど、動物利用にも明確な変化が生じる。しかし動物の象徴的利用に関しては、先行する形成期に発生した儀礼が一部踏襲されるほか、インカなど後世の文化との連続性もうかがわれる。社会の崩壊と再編成が生じるとき、社会の統合原理として機能していた祭祀や儀礼、動物に付加された抽象的意味はどのような影響を受けたのだろうか。本研究では歴史的な視座にたち、これまで議論されてこなかった変革期における社会の統合原理の連続性と断絶を探求した。

生業と世界観を統合的に解釈し社会の原理を究明するには、ひとつの資料を多面的な視点から検討することが有効である。学際研究、学融合はフィールドワーク型の研究プロジェクトにとって定石となっているが、本研究ではこれをさらに発展させ、1点の骨資料について動物考古学、生物化学、同位体分析、考古学、文化人類学の諸手法を適用してより多くの情報を抽出することを強く意識した。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

ペルー北高地および隣接する海岸地域を主たる調査地とし、これらの地域に展開した形成期中期から末期（前1,200～0年頃）の社会と、後続する地方発展期（後1～600年頃）の社会を取り上げた。調査対象となる遺跡には、申請者らが過去15年間にわたって調査を行ってきたパコパンバ遺跡のほか、クントウルワシ遺跡、ラスワカス遺跡など、形成期を代表する大規模神殿を含む。とくにパコパンバ遺跡については形成期後期（前800～前400）に神殿としての機能を停止したあと、地方発展期に再利用されたことがわかっており、同一遺跡において社会変化の前後で動物利用を比較検証できる利点がある。具体的な課題として下記の3点を設定した。

(2) 研究方法

考古動物相の同定

低緯度帯に隆起するアンデス山脈は高度によって熱帯から寒帯まで生態系が劇的に変化する地理上の特徴をもつ。本研究で調査する遺跡はいずれも比較的温暖な高度2,000～2,500mの丘陵上に位置しているが、徒歩1日の圏内に乾燥した熱帯からアマゾンに連なる森林地帯までを包含する。それぞれの環境に生息する動物相が異なっているため、利用可能な動物は多種にわたる。遺跡出土動物骨資料を構成する分類群を同定することにより、人々が実際に利用した動物のリストを明らかにするとともにそれらを調達した領域を特定できる。

これまでの研究により、調査対象遺跡の出土動物相は把握されているものの、動物各種の生態を参照して図像分析を進めるうえでさらに高精度な同定が必要となる。また骨破片の形態観察では区別が難しい鳥類については、形態解析、古代DNA解析、タンパク質分析等を用いて分類群の特定を行った。

家畜飼育開始時期と不平等社会出現の時差確認

申請者らの調査により、形成期後期（前800年～400年頃）にパコパンバ遺跡、クントウルワシ遺跡の両遺跡においてリャマの飼育が開始されたことが判明している。狩猟によって野生動物を捕獲するのとは異なり、家畜はその出生と死を人間が管理下に置く。人間と動物の関係という点において画期的な変化である。パコパンバ遺跡ではリャマ飼育の開始と同時期に、遠距離交易による威信材の搬入や黄金製品を副葬された貴人墓が出現するなど、エリート層が形成され、社会内部に不平等化が進んだ徴候がある。家畜飼育の開始と不平等社会出現の関連性を確認するため、放射性炭素年代測定を実施しそれぞれの事象の正確な編年を確立することを目指した。

なお、リャマ飼育については荷駄獣として他地域との交易に用いられた可能性を考慮し、出生から死に至るまでの生息環境をストロンチウム同位体分析によって確認した。これにより他地域産の個体と遺跡周辺で生産された個体の使い分けについても検討が可能となり、神殿における動物儀礼の具体的な理解に寄与できる。

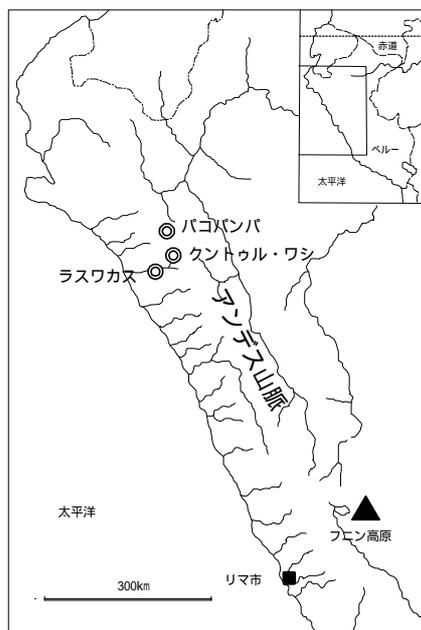
饗宴儀礼と食物連鎖を暗示する図像の解釈

饗宴（feasting）は食事をもとにすることで共同体の結びつきを強める社会的行為であり、多くの人類集団で重視される。近年、考古学研究においても饗宴跡に注目し、先史社会の理解につなげようとする動きが活発化している。パコパンバ遺跡では神殿中核部から複数の饗宴遺構が検出されており、予備的な調査からは多種にわたる動物が確認されている。動物の入手・消費・廃棄にいたる一連の過程が社会統合を強める役割を果たしたと想定されることから、タフォノミー、動物考古学、同位体分析から饗宴行為の全体像を復元し、建築・遺構のコンテキストとの関連を対応させる。

4. 研究成果

(1) 考古動物相の同定

パコパンバ遺跡とクントウルワシ遺跡で出土した動物相を明らかにした。オジロジカ、ラクダ科、ワタオウサギ、テンジクネズミ、オポッサムなど主に遺跡周辺に分布する哺乳類を中心にしながらも、オマキザル類、パカラナなど、森林に生息する動物群が検出されたことが特徴である。



神殿における儀礼行為に関係し、異なる生態系から動物が調達されていたことが示唆される。なお、ここでは神殿社会の構成員が直接的に動物を捕獲するのみならず、交易等により間接的に入手していた可能性もあり、神殿社会の活動域として認識するべきであろう。各遺跡とも神殿が立地する生態系の外から搬入した動物を含むことは、形成期社会がローカルな経済活動にとどまらず、社会の広域化に向かっていったことを示すものである。

(2)家畜飼育の開始と社会

パコパンバ遺跡、クントゥルワシ遺跡から出土したラクダ科動物は、骨形態の分析から家畜のリヤマであったことが確認された(Uzawa et al.2021)。また、リヤマの同位体分析の結果からは、キャラバンによってもたらされた遠来の個体ではなく遺跡周辺で飼育された個体であることも判明した(Takigami et al. 2020)。両遺跡におけるリヤマの出現は形成期後期であることが、再度、確認された。

人と動物の関係が、社会における人間同士の関係にも敷衍されるという仮説にもとづけば、アンデス古代社会における不平等社会の出現は形成期後期以降になると想定できる。しかしながら、この想定を覆す発見があった。リヤマ飼育の開始に先立つ形成期中期において、神殿中核部に、大量の奢侈品とともに埋葬された貴人の墓が検出されたのである。このことは、当地における家畜飼育の開始に先立ち、すでに権力が発生していたことを明確にしめすものである(Seki)。

人と動物の関係と、社会の複雑化の関係については、新たなモデルに基づいて検討を行う必要がある。

(3)饗宴儀礼と動物図像

饗宴には遺跡から出土した動物の大半の種が供されていた。ただし、ネコ科動物に代表される生態系の上位に位置する捕食は含まれていない。遺構、遺物を修飾する図像に捕食動物が好んで用いられることと対照的である。私たちはこの事象の解釈として、饗宴の主催者が捕食動物の役割を演じ、周辺の生態系から収集された動物を食べ、自らがヒエラエルキーの上位にいることを参加者に示したのではないかと考える。この仮説は遺跡から出土する石像、土器、レリーフ等に、半人半獣の図像が描かれることとも整合する。

引用文献

Brotherstone, G. (1989) Andean Pastoralism and Inca Ideology. In J. Clutton-Brock (ed.), *The Walking Larder: Patterns of Domestication, Pastoralism, and Predation*, pp.240-55. London: Unwin Hyman.

Haudricourt, A. G. (1962) Domestication des animaux, culture des plantes et traitement d' autrui. *Homme* 2(1): 40-50.

Hodder, I. (1990) *The Domestication of Europe: Structure and Contingency in Neolithic Societies*. Oxford: B. Blackwell.

Ingold, T. (1980) *Hunters, Pastoralists, and Ranchers: Reindeer Economies and Their Transformations*. Cambridge: Cambridge University Press.

Takigami M., Uzawa K., Seki Y., Chocano D.M. and Yoneda M. (2020) Isotopic Evidence for Camelid Husbandry During the Formative Period at the Pacopampa Site, Peru. *Environmental Archaeology* 25, 262-278.

Uzawa, K., Y. Seki, D. Morales Chocano (2021) Ritual consumption and sacrifice of llama (Lama grama) at the Pacopampa site in the Northern Highlands, Peru. *Anthropological Science*, Vol 129(2) pp.109-119.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 7件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Uzawa Kazuhiro, Seki Yuji, Chocano Daniel Morales	4. 巻 129
2. 論文標題 Ritual consumption and sacrifice of llama (<i><i>Lama glama</i></i>) at the Pacopampa site in the Northern Highlands, Peru	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 109 ~ 119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.2104111	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Takigami Mai, Seki Yuji, Nagaoka Tomohito, Uzawa Kazuhiro, Chocano Daniel Morales, Mukai Hitoshi, Yoneda Minoru	4. 巻 129
2. 論文標題 Isotopic study of maize exploitation during the Formative Period at Pacopampa, Peru	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 121 ~ 132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.210531	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Nagaoka Tomohito, Seki Yuji, Uzawa Kazuhiro, Morita Wataru, Chocano Daniel Morales	4. 巻 129
2. 論文標題 Prevalence of dental caries and antemortem tooth loss at Pacopampa in an initial stage of social stratification in Peru 's northern highlands	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 165 ~ 185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.210505	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 関雄二	4. 巻 35
2. 論文標題 権力分析の異なる位相 アンデス文明初期における威信財と社会的記憶	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 102-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Seki Yuji	4. 巻 129
2. 論文標題 Preface to the special issue on Humans, Animals and Societies of Andean Civilization	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 107 ~ 108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.210511	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takigami Mai, Uzawa K., Seki Y., Chocano D. Morales, Yoneda M.	4. 巻 25
2. 論文標題 Isotopic Evidence for Camelid Husbandry During the Formative Period at the Pacopampa Site, Peru	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Environmental Archaeology	6. 最初と最後の頁 262 ~ 278
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/14614103.2019.1586091	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Nagaoka Tomohito, Seki Yuji, Livia Mauro Ordonez, Chocano Daniel Morales	4. 巻 128
2. 論文標題 Depressed skull fracture at Pacopampa in the Peru's northern highlands in the Late Cajamarca Period	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 83 ~ 87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.2004061	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yuji Seki and Daniel Saucedo Segami	4. 巻 Supplementum II
2. 論文標題 Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial para su uso y proteccion en la sierra norte del Peru	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Acta Hispanica	6. 最初と最後の頁 737-746
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Nagaoka Tomohito, Sekil Yuji, Hidalgo Juan Pablo Villanueva, Chocano Daniel Morales	4. 巻 128
2. 論文標題 Bioarchaeology of human skeletons from an elite tomb at Pacopampa in Peru's northern highlands	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 11~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.200218	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計13件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 鶴澤和宏、関雄二、ダニエル・モラーレス・チョコカーノ
2. 発表標題 ペルー北高地パコパンバ遺跡における偶蹄類の儀礼的消費
3. 学会等名 第26回古代アメリカ学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関雄二
2. 発表標題 アンデス文明における神殿と都市
3. 学会等名 新学術領域研究「西アジア都市」領域全体研究会 特別講演会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 関雄二
2. 発表標題 ペルー北高地パコパンバ遺跡における防御遺構：インカと在地社会
3. 学会等名 金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」成果報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田晃章・江田真毅・松前ひろみ・粟野若枝
2. 発表標題 ナスカ文化の骨製縦笛の分析 - 年代測定と形態分析から -
3. 学会等名 2021年度アンデスコレクション研究懇談会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江田真毅
2. 発表標題 鳥と古代人のトリドリばなし～ニワトリ・「鶺鴒」と弥生人、地上絵の鳥とナスカ人～
3. 学会等名 群馬県立自然史博物館・企画展講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 瀧上舞，鶴澤和宏，井口欣也，関雄二
2. 発表標題 アンデス文明初期におけるラクダ科動物飼育の検証　クントゥル・ワシ遺跡の 事例
3. 学会等名 第11回同位体環境学シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuji Seki, Daniel Morales, Juan Pablo Villanueva, Diana Aelman, Mauro Ordonez
2. 発表標題 Pacopampa: 14anos de investigacion y conservacion del centro ceremonial formativo.
3. 学会等名 Ciclo de conferencias magistrales Tema: Arquitectura Monumental Prehispanica, CONADEA(Coordinadora Nacional de Estudiantes de Arqueologia). (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuji Seki
2. 発表標題 Repensando el impacto cultural de la sierra norte en la costa norte peruana durante la epoca prehispanica
3. 学会等名 Arqueologia del valle de Lambayeque (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関雄二
2. 発表標題 権力分析の異なる位相 - アンデス文明初期における威信財と社会的記憶 -
3. 学会等名 シンポジウム社会進化の比較考古学 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関雄二
2. 発表標題 社会的記憶と無形遺産の導入 南米ペルー高地での有形遺産保護の試み
3. 学会等名 令和2年度文化財行政講座 文化庁 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関雄二
2. 発表標題 科学分析から見たアンデス文明初期の神殿の変貌
3. 学会等名 金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」オンライン・シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Daniel D. Saucedo Segami, Yuji Seki
2. 発表標題 A Bridge between the Past and the Present: Cultural Heritage as a Mean to Build Social Memory in Peru
3. 学会等名 連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ 集会的健忘に抗するための文化伝達 第4回 学術活動をとおした継承」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関雄二
2. 発表標題 アンデス考古学の視点から
3. 学会等名 鳥居龍蔵生誕150周年記念 国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会 - その学問と資料の意義を問う - 」 主催：徳島県・一般財団法人自治総合センター 後援：総務省
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 ラテンアメリカ文化事典編集委員会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 780
3. 書名 ラテンアメリカ文化事典	

1. 著者名 関 雄二	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 366
3. 書名 アンデスの考古学 新版	

1. 著者名 ラテンアメリカ文化事典編集委員会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 780
3. 書名 ラテンアメリカ文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究はペルー北高地に所在する著名な神殿遺跡における現地調査と、その出土遺物のペルーおよび日本国内での分析によって構成される。現地調査はペルー国立サンマルコス大学と、本研究の分担者が所属する国立民族学博物館の共同調査として実施されたものである。得られたデータの解釈については、ペルー人考古学者らとの議論をへて共同研究として論文化した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	關 雄二 (Seki Yuji) (50163093)	国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授 (64401)	
研究分担者	瀧上 舞 (Takigami Mai) (50720942)	独立行政法人国立科学博物館・人類研究部・研究員 (82617)	
研究分担者	江田 真毅 (Eda Masaki) (60452546)	北海道大学・総合博物館・教授 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------